

保存用

御津町埋蔵文化財発掘調査報告 7

10

岡山県御津町教育委員会

平岡西遺跡

II

1991年3月

岡山県御津町教育委員会

御津町教育委員会

はじめに

御津町平岡西の傾斜地を平成元年3月4日から31日まで御津町教育委員会が調査したものである。

圃場整備の緊急性から新庄尾上遺跡の調査と並行して担当したため困難な調査となった。遺構面については、その殆んどが近世以降の耕作により形成されたもので、掘立柱建物1棟分の柱根、礎板、礎石の遺存が認められた。

調査にあたり、県文化課、古代吉備文化財センター及び御津町役場農業土木課、地元地権者の方々や直接発掘調査にたずさわれた各位に感謝申し上げ、はじめのことばといたします。

平成3年3月31日

御津町教育委員会

教育長 宮本久雄

題字は宮本久雄教育長による。

例　　言

- 1 本書は、御津町五城北地区県営圃場整備事業に伴い発掘調査を実施した「平岡西遺跡」の調査成果報告書のⅡである。
- 2 遺跡は岡山県御津郡御津町大字平岡西 890 番地ほかに所在する。
- 3 現地での調査は1989年3月3日から3月31日まで実施し、その後、遺物整理、本書の作成を行なった。
- 4 調査は、岡山県岡山地方振興局の委託を受け、御津町教育委員会が実施した。
- 5 調査は下記の体制で実施した。

御津町教育委員会 教育長 宮本 久雄（1989年3月まで教育次長兼務）

教育次長 五藤 始（1989年4月より）

主任幹 賴定 節夫（1989年3月まで）

同 海野 仁志（1989年4月より）

社会教育主査 宇野 尚憲

書記 長谷川一英（調査担当）

- 6 調査にあたっては、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センター、岡山地方振興局農林事業部耕地第2課、岡山県農地開発公社、浦上建設株式会社、御津町役場農業土木課・産業課、地元平岡西地区の方々、御津町文化財保護委員会等からご指導、ご援助を賜った。記して感謝の意を表わしたい。

また、別記の作業員の方々の協力も得た。

- 7 出土遺物、実測図、写真等は御津町教育委員会で保管している。
- 8 本書の執筆、編集は長谷川があたった。

凡 例

- 1 遺構実測図等のレベルはすべてT.P.（東京湾平均海水潮位）を用いた。
方位は図1～4が真北、他が磁北である。
- 2 遺物実測図の断面が白色のものは縄文土器、弥生土器、土師器を、黒色のものは須恵器、陶磁器を示している。
- 3 実測図等の遺跡名は平岡西（HiRaOKa-Nishi）として、その後に調査年度を表記した。さらに、遺跡内を既設の道路、水路により、図3のように地区を分けた。地区名は調査年度の後に表記した。1地区は平岡西88、2地区は平岡西88-2、3地区は平岡西88-3となる。また、遺物には遺物の取り上げ単位ごとに01から登録番号を付与した。遺物の出土地点、出土年月日等は別途作成した遺物台帳に記録し、遺物へは『HRN88-地区-登録番号』とのみ注記した。従って、本書の調査地は3地区内となり、略号は平岡西88-3、または、HRN88-3-登録番号となる。
- 4 遺物の取り上げ、本書の記述に際して、遺構名は以下略号を用いた。

S D……溝

S K……土壤

S P……柱穴、ピット

また、遺構番号も煩雑さを避けるため、調査時に付与した番号をそのまま使用した。

調査参加者

古家悦子・桜井三枝子・佐藤豊子・杉本忠孝・田村美智子・横山嘉節・横山貞子・横山毅・吉行久枝

目 次

はじめに

御津町教育委員会 宮本 久雄

例 言

凡 例

本 文 目 次

図 目 次

写 真 目 次

I 地理的・歴史的環境	1
II 調査に至る経緯と経過	5
III 調査成 果	
1 はじめに	8
2 基 本 層 序	8
3 1区 第1遺構面	8
4 1区 第2・3遺構面	13
5 1区 第3遺構面	22
6 2区 第1遺構面	25
7 2区 第2遺構面	29
IV ま と め	32

図 目 次

図 1 御津町位置図	1
図 2 調査地周辺遺跡分布図	3
図 3 平岡西遺跡地区割図	6
図 4 調査地位置図	7
図 5 調査地土層断面実測図	9~10
図 6 1区 淡灰茶色砂質土・茶灰色砂質土層出土遺物実測図	11
図 7 1区 第1遺構面 遺構出土遺物実測図	11
図 8 1区 第1遺構面平面図	12
図 9 1区 黒灰色粘質土層出土遺物実測図(1)	14

図10	1区 黒灰色粘質土層出土遺物実測図（2）	15
図11	1区 第2・3遺構面平面図	16
図12	1区 第2遺構面 S D05出土遺物実測図	17
図13	1区 第2遺構面 遺構出土遺物実測図	19
図14	1区 第2遺構面 堀立柱建物 平面図・断面図	21
図15	1区 第2遺構面 堀立柱建物間連遺構出土遺物実測図	22
図16	1区 明黄褐色砂質土層出土遺物実測図	23
図17	1区 第3遺構面 遺構出土遺物実測図	23
図18	1区 第3遺構面平面図	24
図19	2区 明赤黄色粘質土層出土遺物実測図（1）	26
図20	2区 明赤黄色粘質土層出土遺物実測図（2）	27
図21	2区 第1遺構面平面図	28
図22	2区 灰色系砂質土層出土遺物実測図	29
図23	2区 第2遺構面平面図・断面図	30
図24	2区 第2遺構面 遺構出土遺物実測図	31

写 真 目 次

写真1	調査地遠景（東から）	35
写真2	調査地近景（西から）	35
写真3	1区 第1遺構面 2区 第1遺構面（南西から）	36
写真4	1区 第1遺構面 2区 第1遺構面（北から）	36
写真5	調査風景	37
写真6	調査風景	37
写真7	1区 第2・3遺構面 2区 第2遺構面（南西から）	38
写真8	1区 第2・3遺構面 2区 第2遺構面（北から）	38
写真9	1区 第2・3遺構面 S P40遺物出土状況（南西から）	39
写真10	1区 第2・3遺構面 S P40遺物出土状況（東から）	39
写真11	1区 第3遺構面（南から）	40
写真12	1区 第3遺構面（北から）	40
写真13～18	出土遺物（1）～（6）	41～46

I 地理的・歴史的環境

御津郡御津町は岡山県の中央やや南寄りに位置し、東は赤坂町・山陽町、西は加茂川町・岡山市、南は岡山市、北は建部町・吉井町に接する。1953年の町村合併により誕生した。現在、面積約114km²、人口11,000人弱の町である。平岡西遺跡は旧赤磐郡五城村に位置する。

中小の河川と合流しながら、町内をほぼ南北に旭川が貫流している。町域の約77%は山林・原野である。山地は比較的風化が進み、低平な丘陵を成しているが、北西部には吉備高原に続く標高400m級のものも見られる。これらの山地に囲まれるように、河川沿いに大小の平地が存在している。

平岡西遺跡は、町内の金川で旭川に合流する新庄川の中流域の西側に位置する。建部町との町境を成す350m級の山地から派生する尾根の裾と、新庄川とその支流の小河川の堆積作用によって形成された平地上に立地している。遺跡周辺の地質は花崗岩質である。風化が進んでいるため、浸食・堆積作用を成しやすい。遺跡の現状は、大部分は水田である。

平岡西遺跡の周辺の遺跡としては、数基の古墳と城跡が知られているのみであったが、最近

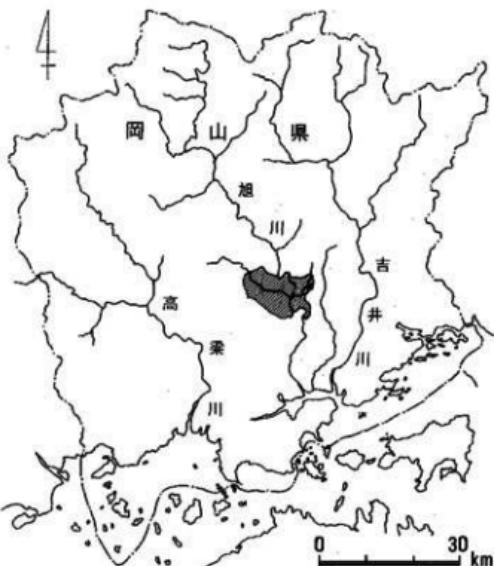


図1 御津町位置図

の圃場整備事業の進展に伴ってこの平岡西遺跡をはじめ、遺跡の新発見が相次いでいる。

縄文時代の遺跡としては、伊田の岩井山丘陵南麓で後期の土器片の採集が報告されているのみであったが、1988年に調査された寺部遺跡の周辺で晩期の、同年に調査された平岡西遺跡の別地点で早期、晩期の土器片の出土を見ている。今後の調査によって、縄文時代の遺跡が発見される可能性が少なくない。

弥生時代の遺跡としては、平岡西遺跡の南約4kmに新庄尾上遺跡の存在が知られていた。最近になって、北に年次遺跡、東

に赤鉢遺跡・矢知遺跡・南に寺部遺跡・銀治屋谷遺跡・新庄原遺跡等この時期の遺跡が河川沿いの平地から山裾にかけて存在していることが明らかになってきている。

古墳時代の遺跡としては、今回の調査地の西側の尾根上に銀治久古墳が存在している。北に八幡神社古墳、須道山古墳が存在している。いずれも円墳と思われる。八幡神社古墳のみは箱式石棺の主体部が露呈している。地元の方の話では、蓋石は溝の蓋に持ち去られ、その時、「鉄の刀」が出土したとのことである。また、佐野川北岸の山林（図2の3の地点）で土取り中にほぼ完形の須恵器の提瓶が出土している。現地を踏査したが、石材等は見られなかった。しかし、從来から知られているもの以外に、古墳が存在する可能性がある。

弥生時代の各遺跡は、それ以降、中世にいたるまで連續と営まれていたようだ、その時期の遺構、遺物が検出されている。特に、赤鉢遺跡では奈良時代に位置付けられる土器が多量に採集されている。寺部遺跡では1988年の調査で円面鏡が出土している。

中世には、通行の要所を見下ろす様な位置に、平岡西城、矢知城等山城が多数築かれている。この地域が『五城』といわれるのも、その一端を示している。

※ 1989年に矢知遺跡を調査中であった岡山県古代吉備文化財センターの内藤善史文化財保護主任が、重機のオペレーターから譲り受け、御津町教育委員会に提供されたものである。その時の聞き取りを元に現地を踏査した。

- | | |
|----------------|-----------|
| 1 火の釜古墳 | 17 天狗古墳 |
| 2 佐野古墳 | 18 熊野神社古墳 |
| 3 古墳？（須恵器出土地点） | 19 経畔古墳 |
| 4 平岡西城 | 20 寺部遺跡 |
| 5 年次遺跡 | 21 新庄尾上遺跡 |
| 6 一本松1号墳 | 22 西谷城 |
| 7 一本松2号墳 | 23 新庄原遺跡 |
| 8 一本松3号墳 | 24 銀治屋谷遺跡 |
| 9 一本松4号墳 | 25 天神鼻1号墳 |
| 10 赤鉢遺跡 | 26 天神鼻2号墳 |
| 11 矢知城 | 27 天神鼻3号墳 |
| 12 矢知遺跡 | 28 天神鼻4号墳 |
| 13 須道山古墳 | 29 八つ塚古墳 |
| 14 八幡神社古墳 | 30 潤戸古墳 |
| 15 銀治久古墳 | 31 松撫城 |
| 16 平岡西遺跡 | 32 塚の谷遺跡 |

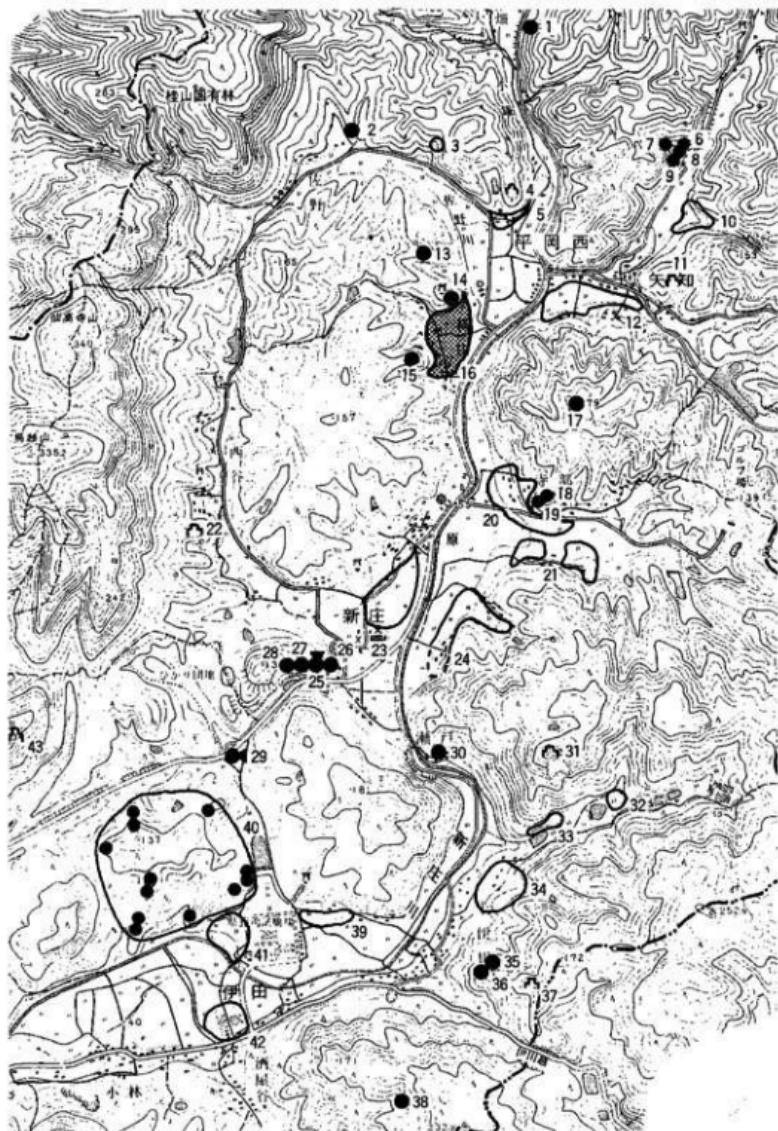


図2 調査地周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

- | | |
|------------|-----------|
| 33 宅美池遺跡 | 39 伊田沖遺跡 |
| 34 上伊田遺跡 | 40 岩井山古墳群 |
| 35 宇那山古墳 | 41 岩井山遺跡 |
| 36 祇園古墳 | 42 酒屋谷遺跡 |
| 37 宇那山城 | 43 熊谷城 |
| 38 しんのう塚古墳 | |

II 調査に至る経緯と経過

御津町五城北地区の県営圃場整備事業は1985年より着工された。順次、事業は進行し、平岡西地区は88年度に施工される予定になった。当初、施工予定地には遺跡は存在しないと考えられていたため、88年8月より工事に着手した。しかし、近年、新庄地区において遺跡の新発見が相次いでいるため、遺跡の有無を確認するため、御津町教育委員会は9月3日に確認調査を行なった。その結果、遺跡の存在が認められたため、9月6日付御地教第1033号で発見届を通知すると共に、関係機関と協議の上、その保存に努めた。しかし、なお削平せざる得ない約400m²については、発掘調査を行なうことになり、9月21日付御地教第1119号で発掘届を通知し、9月26日から11月5日まで発掘調査を実施した。(平岡西遺跡Iとして報告予定)

その後、遺跡の南西部への広がりを確認するために、10月14日、南西部の谷に重機で3本のトレッジを掘削し、遺構、遺物の確認、断面観察を行なった。その結果、やはり、遺跡がこの谷部にまで広がっていることが明らかになった。これを受けて、遺跡保存のため、圃場整備の設計変更を行なったが、約190m²については削平せざる得ない状況になった。そこで、岡山県岡山地方振興局から御津町教育委員会に、発掘調査の委託について打診があった。

当時、教育委員会の調査員は、同じ県営圃場整備事業に伴う、新庄尾上遺跡の発掘調査に当っており、新たな調査は出来ない状況にあった。しかし、岡山地方振興局、御津町役場農業土木課、教育委員会等で調整の上、公共性等を鑑みて、御津町教育委員会が新庄尾上遺跡と併行して調査に当たることになった。

教育委員会では、平成元年2月9日付第3-169号で岡山地方振興局長より文化財保護法第57の2の規定に基づく発掘の届出を受け、2月18日付御地教第1807号で通知すると共に3月3日より調査を開始した。予定外の調査であったため作業員も十分集まらず、調査員も『掛け持ち』のため調査に専念出来ず、厳しい状況にあったが、3月31日なんとか調査を終了した。



図3 平岡西遺跡地区割図 (1 : 5,000)

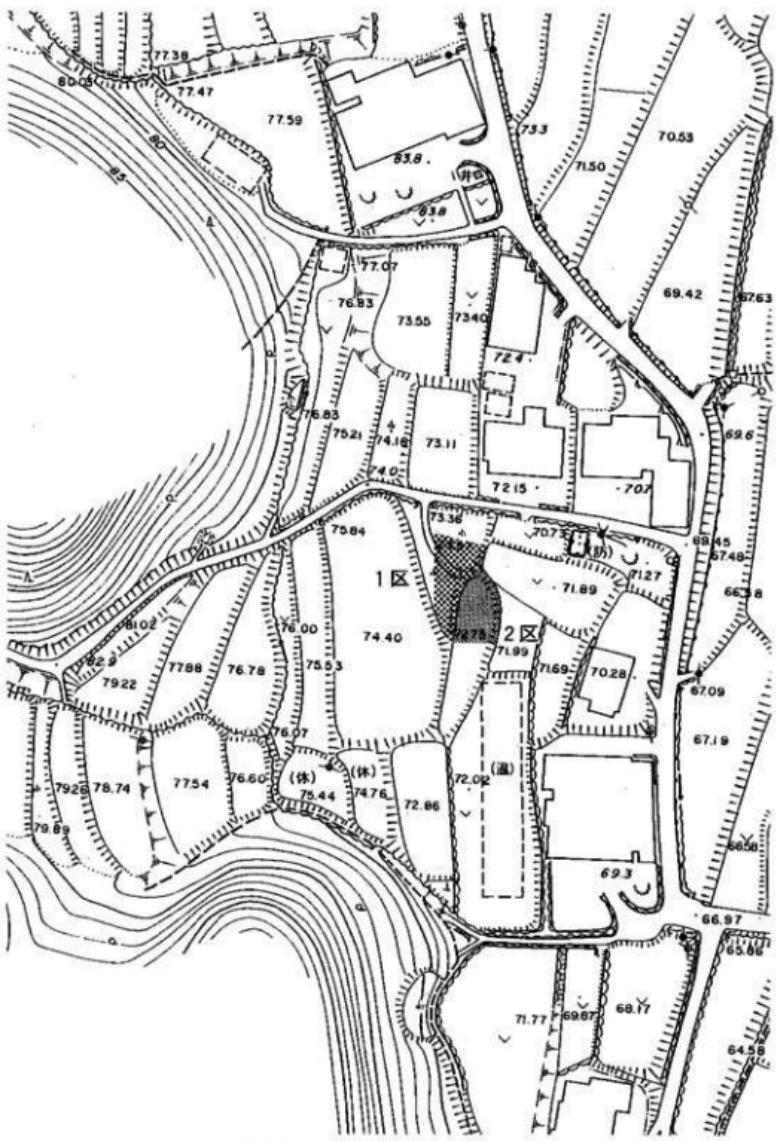


図4 調査位置図 (1 : 1,000)

III 調査成果

1 はじめに

調査は現耕作土を重機で除き、それ以下を人力で掘削した。

調査地は段差を境に上段を『1区』、下段を『2区』と分け、調査を進めた。

遺構面は、1・2区別に、確認された順に上面より、第1、第2、第3遺構面とした。

2 基本層序

調査地は、新庄川へ、東へ向って開く小さな谷の谷口に位置する。地山面は、西から東へ緩やかに傾斜していた。現況は整地等により小さな平坦面を形成し、主に水田として利用していた。調査地の埋土も、東方の低部側より順次堆積していった状況がうかがえた。

1区の基本層序は、上層から、現耕作土、明橙色系粘質土層、茶灰色系砂質土層、黒灰色粘質土層、灰茶色砂質土層、茶褐色砂質土層、暗茶褐色粘質土層、明黄褐色砂質土層であった。

明橙色系粘質土層は、水田耕作土下に見られる、酸化された鉄分が多く含む層であった。1区の全面に堆積していた。遺物は出土しなかった。

茶灰色系砂質土層は1区の南側に堆積していた。層厚は10cm程度であった。遺物の出土は少なかった。

黒灰色粘質土層と灰茶色砂質土層は同時に掘削し、遺物は『黒灰色粘質土層出土』として取り上げた。黒灰色粘質土層は主に1区の南側に堆積していた。灰茶色砂質土層は北に行くに連れ鉄分を増し、淡赤茶色砂質土層となった。これらの層は、南から北へ、西から東へ厚く堆積していた。調査地の中では最も多量の遺物を出土した。

茶褐色砂質土層、暗茶褐色粘質土層、明黄褐色砂質土層は1区の北側のみに堆積していた。遺物の出土は極めて少なかった。

2区の基本層序は、上層から、現耕作土、明赤黄色粘質土層、灰色系砂質土層であった。

明赤黄色粘質土層は、水田耕作土下に見られる酸化された鉄分が多く含む層であった。2区の全面に堆積していた。小片ながら多様な遺物が出土した。

灰色系砂質土層は2区の東寄りに堆積していた。層厚は厚い所で20cm程度であった。遺物の出土は少なかった。

3 1区 第1遺構面

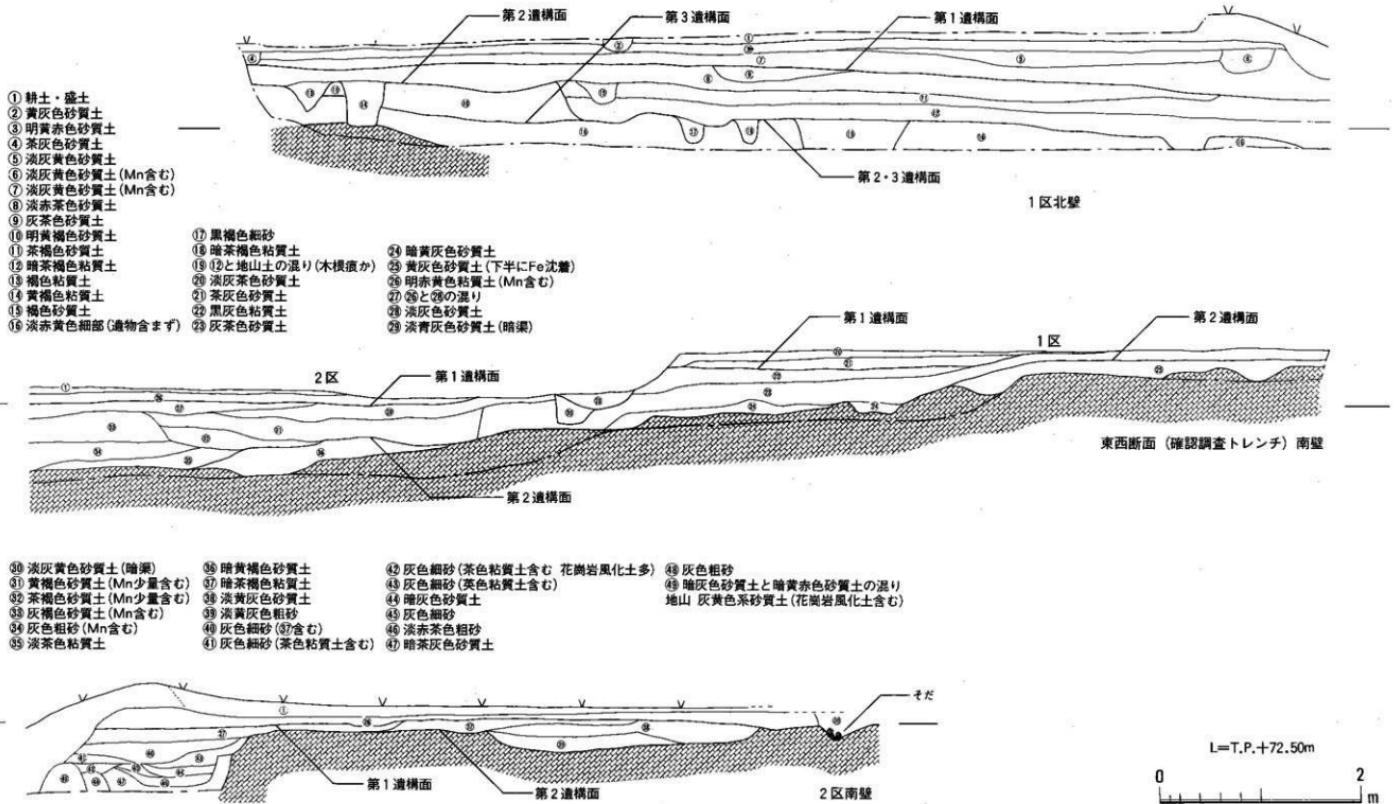


図5 調査地土層断面実測図

第1造構面は明橙色系粘質土層、茶灰色系砂質土層を除いた面である。1区の西半では地山面である。造構面は平坦で、レベルはT.P.+約73mである。

明橙色系粘質土層からは遺物は出土しなかった。

茶灰色系砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼が出土した。1は土師器の壺である。外反する口縁部をもつ。胴部内面はへら削りで成形されている。2は弥生土器である。高杯の脚部である。残存部から全体を復元すると穿孔を6ヶ所もつ。表面磨滅のため調整は不明である。3・4は土師器である。貼付け高台の底部である。表面磨滅のため調整は不明である。胎土は良好である。5は瓦質土器である。壺の口縁部である。頸部にへら磨き調整状のものが見られる。6～10は須恵器である。6～8はつまみ付の蓋である。6のつまみは碁石状を呈する。つまみの位置は中心を外れている。7・8のつまみは偏平化した擬宝珠状を呈する。7の外面には灰緑色の自然釉が厚く付着している。9・10は貼付け高台の底部である。9の高台は断面四角形を呈し、しっかりしている。10の焼成はやや悪く、淡灰色を呈し、軟質である。

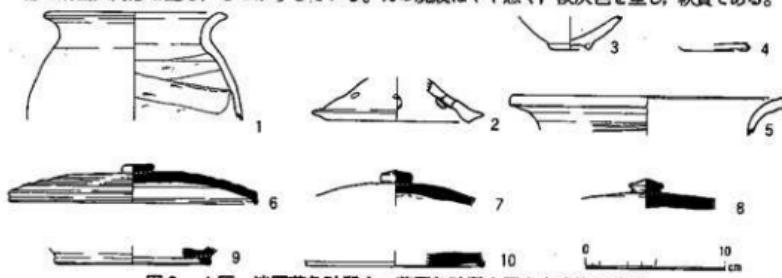


図6 1区 淡茶色茶色砂質土・茶灰色砂質土層出土遺物実測図

第1造構面では少數の溝、土壤、ピットを検出した。

溝は1区南端で2条検出した。埋土は淡茶色砂質土である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼が出土した。SD02は2条のうち南側の東西方向の溝である。幅20～50cm、深さ3～5cmである。埋土からは土師器、須恵器が出土した。11は須恵器である。底面には糸切り痕が残存している。SD02の北側の溝は調査区内で逆L字形に大きく曲っている。これらの溝は東側の2区の方へ流れていたようである。

土壤は1区内に散在して検出した。形状は様々である。埋土は茶灰色砂質土を基本とする。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。SK01は1区北辺中央で検出した平面隅丸長方形を呈する土壤である。長径150cm、短径73cm、深さ15cmで、淡茶灰色砂質土を埋土とする。埋土からは弥生土器、土師器が出土し

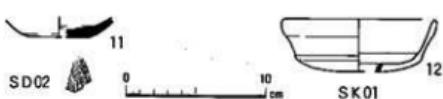


図7 1区 第1造構面 遺構出土遺物実測図

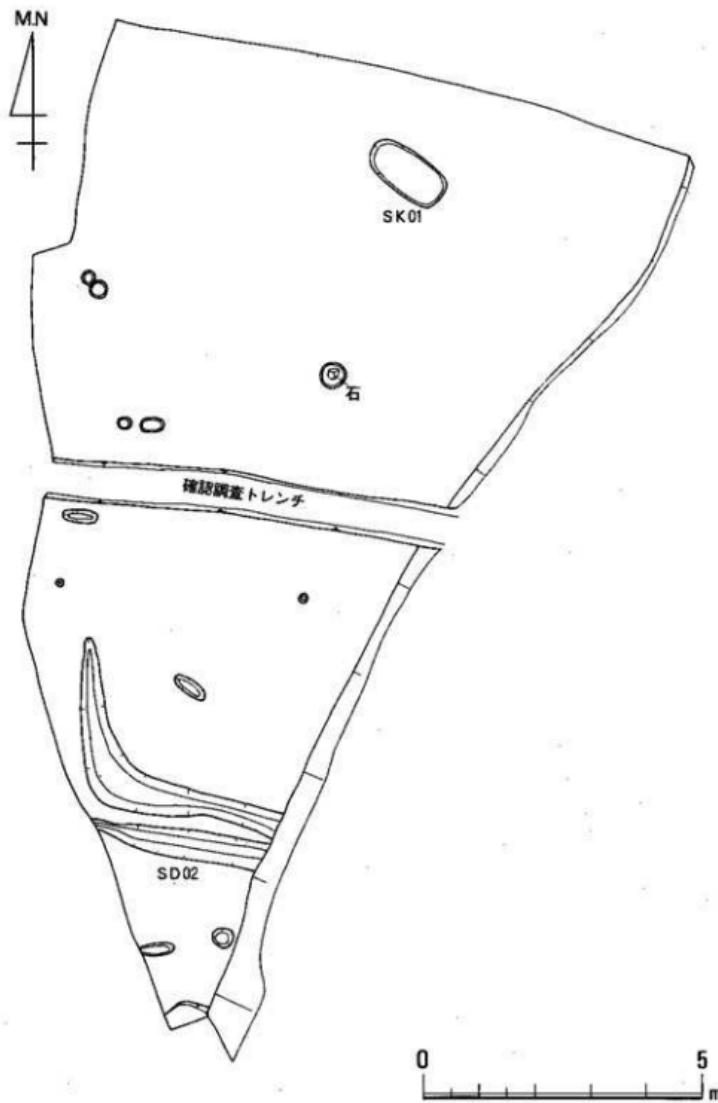


図6 1区 第1遺構面平面図

た。12は土師器である。杯である。斜めに真直ぐ立ち上がる口縁部をもつ。端部は肥大している。底部はやや上げ底である。

ピットは主に1区中央で検出した。平面円形を呈する。規模は様々である。埋土は茶灰色砂質土を基本とする。埋土から弥生土器、土師器が出土したものもある。

1区第1造構面の時期は室町時代前半に位置付けられる。この時期には、調査地は耕作地として利用されていたのであろう。造構、遺物が少ないのもそのためであろう。

4 1区 第2・3造構面

第2・3造構面は黒灰色粘質土層、灰茶色砂質土層、淡赤茶色砂質土層を除いた面である。造構面は南から北へ、西から東へ傾斜していた。段を成して、急激に下がる部分も見られた。検出面のレベルはT.P.+72.2~73.0mである。

この造構面は、確認トレンチより南側と北東端では地山面である。この部分で検出した造構の中には、下面の造構面に属するものが混在している可能性があるが、分離することは出来なかった。従って、この造構面は第2・3造構面と表わす。

黒灰色粘質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、縄文陶器が出土した。

13~18は弥生土器である。13は端面に2条の凹線が巡り、頸部に1条の突帯をもつ。外面は粗いはけ目調整が施されている。14・15の端部は下方に引き出されている。14の端面には5条の凹線が巡る。16の端部は上方に拡張されている。17・18の端部も上方に拡張されている。外面に多条の凹線が巡る。18の端部は折り返して形成されている。19~22は土師器である。壺、甕の口縁部である。20はやや外反する口縁部をもつ、外面には粗いはけ目調整が施されている。表面には粘土紐痕が残存している。21の端部はほぼ水平に折り曲げられている。22の端部はわずかに上方に拡張されている。23~30は弥生土器である。23~26は高杯である。23の口縁部は水平に引き出され、端面に6条の凹線が巡る。内外面共にへら磨き調整が施されている。24は円板充填技法の杯部である。25・26は脚部差し込み技法である。残存部では脚部に穿孔は見られない。内面には成形時の絞り痕が見られる。28は全体に粗い作りである。特に杯部にゆがみが見られる。28・29は壺、甕の底部である。29の外面にははけ目調整が施されている。30は器台の端部である。31は製塙土器の脚部と思われる。端部はつまみ出され、成形時の痕跡をそのまま残している。胎土には細縫が多く含む。2次焼成は受けていない。

32~54は土師器である。32は甕の口縁部である。全体に粗いなで調整が施されている。内面には指頭圧痕が残存している。33~38は貼付け高台の底部である。高台の断面は三角形を呈している。39は台付甕である。体部は成形時の強いよこなで調整のため、凹凸が著しい。40~43は台付甕のものと思われる貼付け高台の底部である。高台は薄く、外方に踏張る様な形態をし

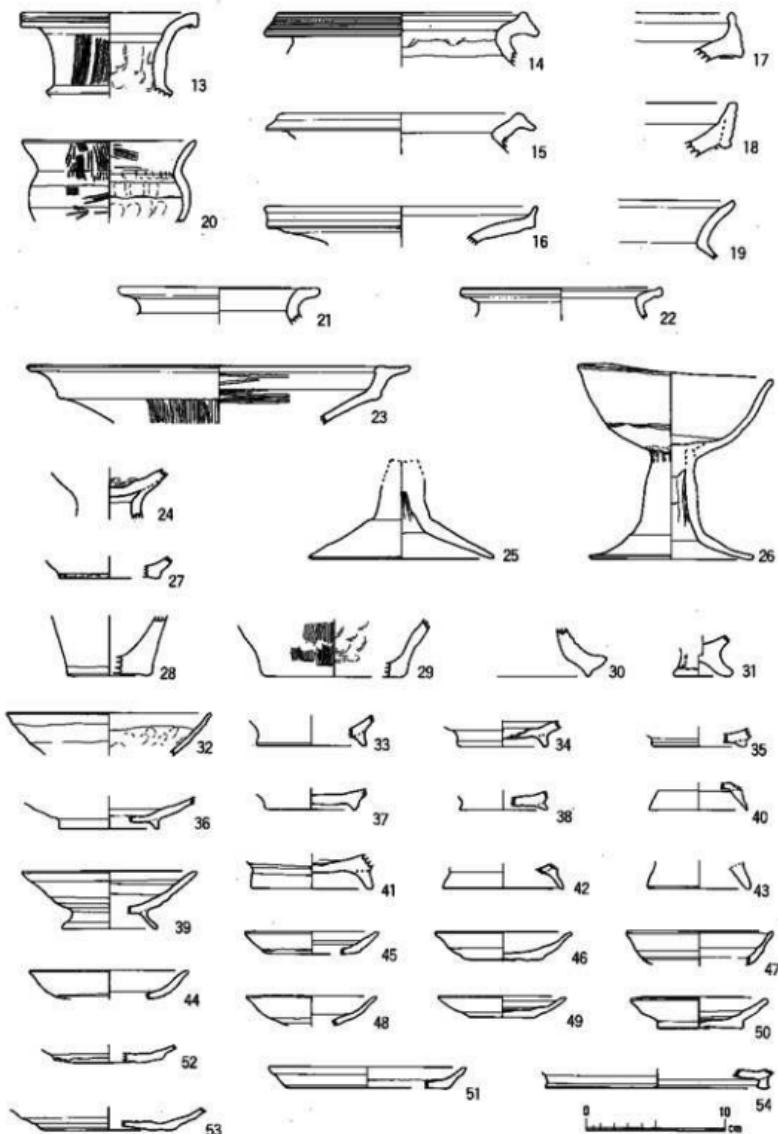


図9 1区 黒灰色粘質土層出土遺物実測図(1)

ている。44～50は小皿である。口縁部は1段のよこなで調整で仕上げられ、やや外反している。47は焼成不良の須恵器の蓋の可能性がある。50の底部は肥大し、高台状を呈している。51は皿である。小皿と同様の形態を成している。52・53は底部である。全体によこなで調整が施され、凹凸が残存している。52の底部外面には粘土紐痕が見られる。54は貼付け高台の底部である。高台は断面台形を呈し、しっかりしている。

55～67は須恵器である。55・56は貼付け高台の碗である。体部は回転ヨコナデ調整が施されている。口縁部はやや外反する。高台は断面三角形を呈する。55の高台は梢円形にゆがんでいる。56の底部は突出し、安定は悪い。57～59は碗の口縁部である。回転ヨコナデ調整が施されている。58・59は外反している。60は碗の底部である。回転ヨコナデ調整が施されている。高台の断面は三角形を呈している。61～64は貼付け高台の底部である。61の高台は断面四角形を呈し、ほぼ直立している。62の高台は高く、外方に踏張っている。63の内面には灰緑色の自然釉がゴマ状に付着している。65は甕の口縁部である。大きく外反し、端部はやや拡張されている。断面は暗茶色を呈する。66・67は底部である。外面は回転ヨコナデ調整が施されている。内面には成形時の凹凸が残存している。66の底部外面には窯着が有り、安定は悪い。

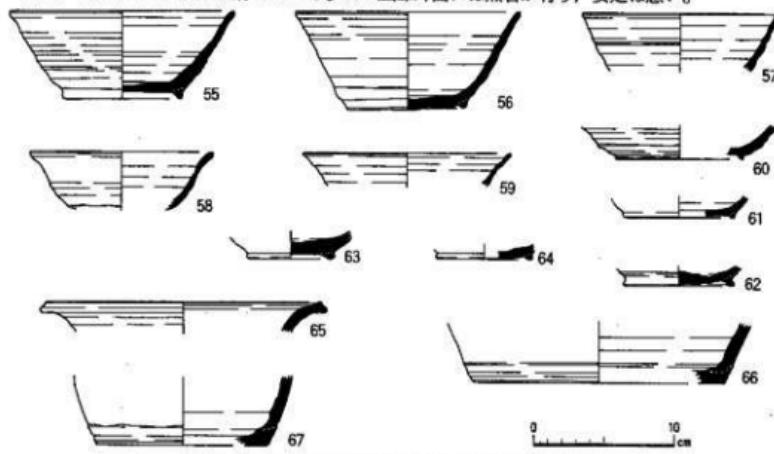


図10 1区 黒灰色粘質土層出土遺物実測図(2)

第2・3造構面では溝、土壤、多数のピット、掘立柱建物1棟を検出した。

溝は1区北半で南北方向のものを2条、南半でコの字形に曲がるもの1条を検出した。埋土は茶灰色砂質土を基本とする。SD05は1区北西角で検出した東西方向の溝である。東側は北へ曲がり、調査区外へ延びていた。幅50cm、深さ10cmである。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。68～75は甕の口縁部である。68・69は甕の口縁部である。端部はやや下方に拡張され

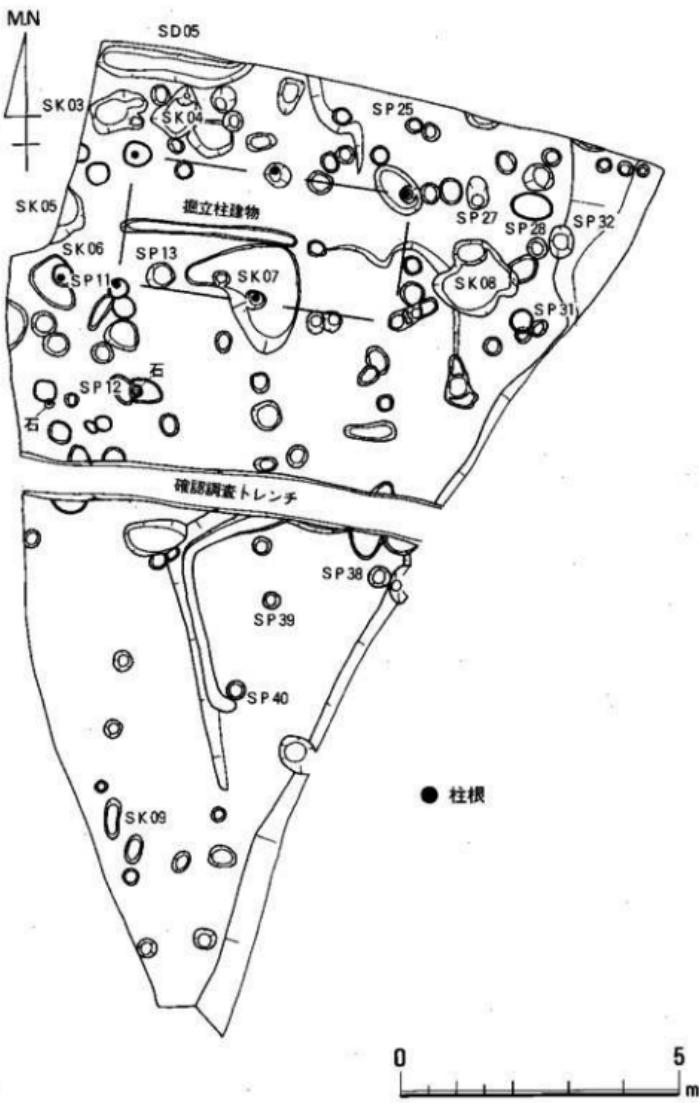


図11 1区 第2・3造構面平面図

ている。70は底部である。内面には指頭圧痕が残存している。71・72は甕の口縁部である。端部は下方に拡張されている。端面にへら描きの鋸歯文が描かれている。71はさらに半裁竹管文も描かれている。73～75は高杯である。73は杯部で外反する口縁部をもつ。74は脚部で端部がやや肥大している。76はいわゆる飾り高杯の杯部である。内面に3条、外面に2条、突堤端面に2条の凹線が巡る。

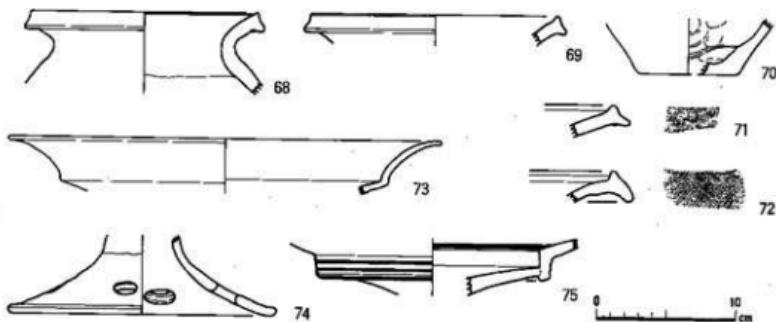


図12 1区 第2造構面 S D 05出土遺物実測図

土壤は1区内の所々で検出した。形態は様々である。埋土は茶灰色砂質土を基本とする。

S K 03は1区北西部で検出した平面隅丸長方形を呈する土壤である。長径75cm、短径63cm、深さ27cmである。東側でピット2基と切り合っていた。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。76～78は土師器である。76は杯の底部、77は高台部、78は口縁部である。表面磨滅のため、詳細は不明である。

S K 04はS K 03の東で検出した平面長方形を呈する土壤である。北角はピットと切り合っていた。長径75cm、短径65cm、深さ20cmである。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。79は土師器である。杯の底部である。体部はよこなで調整による凹凸が著しい。底部外面には粘土紐痕が残存している。80は須恵器である。楕の口縁部である。回転ヨコナデ調整が施されている。

S K 05はS K 03の南で検出した土壤である。西側は調査区外へ広がるため、検出した範囲では平面半円形を呈する。直径106cm、深さ46cmである。埋土からは弥生土器が出土した。81・82は弥生土器である。81は甕の口縁部である。端部を折り返して端面を作り、そこへ6条の凹線文と粘土紐による加飾を施す。82は甕の口縁部である。端部を折り返して端面を成している。

S K 06はS K 05の南で検出した平面三角形を呈する土壤である。北東辺でS P 11と切り合っていた。長径100cm、短径75cm、深さ23cmである。埋土は淡青灰色砂質土である。埋土からは

弥生土器、土師器が出土した。83は弥生土器である。壺の口縁部であろう。端部はつまみ上げられている。

S K07は1区北半中央で検出した平面三角形を呈する土壙である。南西辺でピット2基と切り合っていた。長径220cm、短径196cm、深さ32cmである。底面は中央に向って緩やかに下っていた。埋土からは弥生土器が出土した。84は弥生土器である。壺の口縁部である。端部は上方に拡張されている。内面は頸部までへら削りが施されている。

S K08は1区北半東寄りで検出した平面不定形の土壙である。長径128cm、短径105cm、深さ20cmである。北角はさらに20cmほど落ち込んでいた。埋土は暗灰色砂質土である。埋土からは土師器、須恵器が出土した。85は土師器杯である。体部は斜めに真直ぐ立ち上がり、よこなで調整が施されている。底部は突出し、安定性は悪い。焼成不良の須恵器の可能性もある。

S K09は1区南端近くで検出した平面長円形を呈する土壙である。長径85cm、短径27cm、深さ32cmである。埋土は灰色砂質土である。埋土からは土師器が出土した。86~88は土師器である。86・87は小皿である。87は器壁も厚く、立ち上がりも低い。88は杯である。端部は肥大している。

ピットは1区全面に散在して検出された。特に北半で多く検出した。規模は様々だが、平面円形を呈するものが多い。埋土は茶灰色砂質土を基本とする。

S P11は1区北半西辺で検出した平面円形を呈するピットである。S K06と切り合っていた。直径40cm、深さ20cmである。南西寄りで柱根を検出した。遺存部で径14cmを計る。埋土からは土師器、須恵器が出土した。89は東播系の須恵器のねり鉢である。内面に炭化物が付着している。

S P12はS P11の南東2.3mで検出した平面隅丸長方形を呈するピットである。長径53cm、短径37cm、深さ27cmである。北東角で他のピットと切り合っていた。埋土は灰色砂質土である。埋土からは弥生土器が出土した。90は弥生土器である。壺である。端部は上下に拡張されている。外面ははけ目調整が施され、内面は頸部までへら削りが施されている。

S P13はS P11の東1.7mで検出した平面円形を呈するピットである。直径50cm、深さ27cmである。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。91は土師器である。壺の口縁部であろう。内窓している。

S P25は1区北東部で検出した平面梢円形を呈するピットである。直径30cm、深さ9cmである。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。92は須恵器である。壺の口縁部である。やや内窓している。

S P27は1区北東部で検出した平面梢円形を呈するピットである。北側の壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は南に寄っている。長径58cm、短径35cm、深さ24cmである。埋土からは弥生

土器が出土した。93は弥生土器である。高杯の脚部である。外面にはへら描きによる直線文が全面に施されている。内面には成形時の凹凸が残存している。

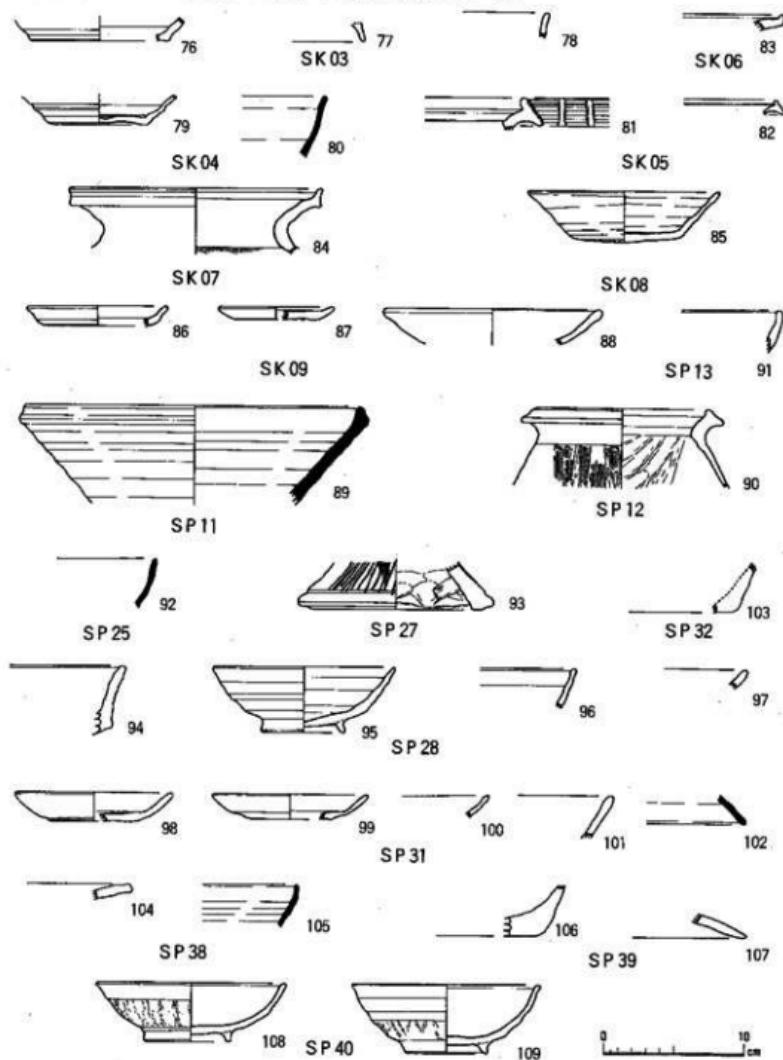


図13 1区 第2遺構面 遺構出土遺物実測図

S P 28はS P 27の東で検出した平面椭円形を呈するビットである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長径75cm、短径46cm、深さ33cmである。埋土からは土師器、須恵器が出土した。94は弥生土器である。高杯の口縁部である。外面にはへら磨き調整が施されている。胎土は良い。96～97は土師器である。96は貼付け高台の碗である。体部は内湾しながら立ち上がる。高台は高い。内外面共よこなで調整で仕上げられている。96は碗の口縁部である。端部はやや肥大している。97は皿の口縁部であろう。

S P 31は1区北半東辺で検出した平面円形を呈するビットである。直径40cm、深さ20cmである。埋土は暗灰色砂質土である。埋土からは土師器、須恵器が出土した。98～101は土師器である。98・99は小皿である。口縁部は1段のよこなで調整で仕上げられている。100は皿の口縁部である。101は碗の口縁部である。端部はやや肥大している。102は須恵器である。杯蓋である。外面には黒灰色の自然釉が付着している。

S P 32はS P 28の南東で検出した平面椭円形を呈するビットである。長径58cm、短径44cm、深さ45cmである。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。103は弥生土器である。底部である。内面は剥離している。

S P 38は1区東辺中央で検出した平面円形を呈するビットである。直径40cm、深さ22cmである。埋土は暗灰色砂質土である。埋土からは土師器、須恵器が出土した。104は土師器である。甕の口縁部である。105は須恵器である。碗の口縁部である。焼成時に伏せていたためか、口縁部外面に黒色の自然釉が付着している。

S P 39は1区ほぼ中央で検出した平面円形を呈するビットである。直径30cm、深さ32cmである。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。106・107は弥生土器である。106は底部である。胎土は粗い。107は高杯脚端部である。

S P 40は1区南半中央で検出した平面円形を呈するビットである。直径32cm、深さ40cmである。埋土からは土師器が出土した。108・109は土師器である。貼付け高台の碗である。これらは上向きに重なり合って出土した。体部外面下半には指頭圧痕を残すが、他はよこなで調整が施されている。

掘立柱建物は1区北半中央で検出した。規模は1間×2間である。方位はN-7°-Eである。柱間は妻面で2.30～2.36m、桁面で2.35～2.55mである。柱穴の掘方は平面円形を呈する。直径31～50cm、深さ21～33cmである。埋土は茶灰色砂質土を基本とする。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。S P 20は南東角の柱穴である。110は土師器である。甕の口縁部である。端部はやや上方に引き上げられている。S P 48は南西角の柱穴である。111は土師器である。高杯の脚端部である。内面には粗いなで調整が施されている。また、南東角の柱穴を除く、すべての柱穴に柱根が遺存していた。112はS P 48に遺存していた柱根で、検出した中で、最も

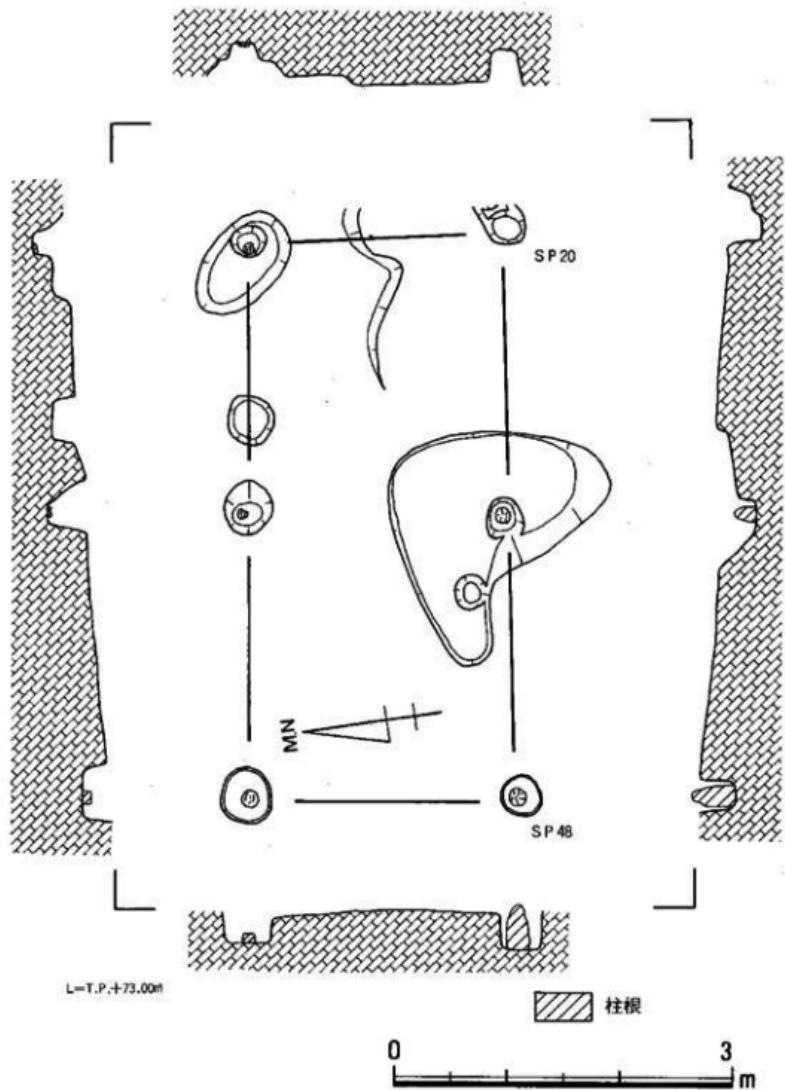


図14 1区 第2造構面 挖立柱建物 平面図・断面図

状態が良いものである。断面八角形を呈し、最大径18cmを計る。底面は切断痕をそのまま残しているが、側面は全体的にていねいに面を整えている。

これらの第2・3造構面の時期は、鎌倉時代前半以前に位置付けられる。

この時期、調査地は最も盛況を呈していた時代である。居住地として利用されていたのであろう。

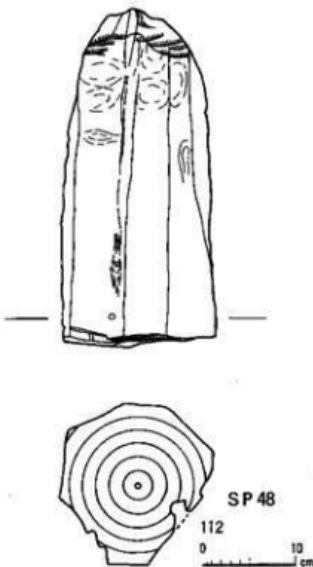


図15 1区 第2造構面 振立柱建物関連造構出土遺物実測図

5 1区 第3造構面

第3造構面は、茶褐色砂質土層、暗茶褐色粘質土層、明黄褐色砂質土層を除いた面である。これらの土層は1区の確認トレンチより北側にのみ堆積していた。検出面は西から東へ緩やかに傾斜していた。レベルはT.P.+72.4~72.9mである。

茶褐色砂質土層、暗茶褐色粘質土層、明黄褐色砂質土層は同時に掘削し、遺物は『明黄褐色砂質土層出土』として取り上げた。

第3造構面の検出面は地山面である。第4節でも述べたように、前節で扱った造構の中にも地山面に形成されたものがある。本来ならこれらの造構が、第2造構面に伴うものなのか、第3造構面に伴うもののか分離する必要がある。しかし、現状では不可能であった。従って、第3造構面としたのは、明黄褐色砂質土層等が堆積していた範囲で、それらを除いた面のみである。

明黄褐色砂質土層からは繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。113は弥生土器である。高杯部である。口縁部はほぼ直立する。外面はへら磨き調整が、内面はなで調整が施されている。口縁部外面には6条の凹線が巡る。114は土師器蓋である。口縁部は大きく外

反する。胸部外面にはへら磨き調整が、内面には頸部までへら削りが施されている。115・116は縄文土器である。同一個体のものと思われる。晩期の浅鉢の体部下半である。外面上半にはなで調整が施され、下半には貝殻条痕が見られる。内面にはなで調整が施されている。胎土は粗く、砂粒を多く含む。外面は褐色、内面は淡茶色、断面は暗黄灰色を呈する。

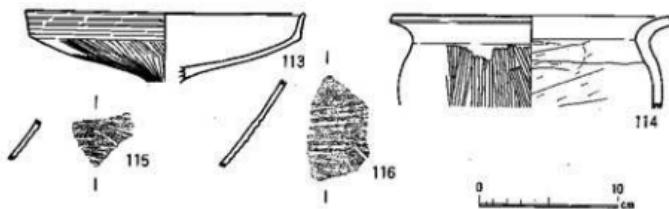


図16 1区 明黄褐色砂質土層出土遺物実測図

第3遺構面では少數の土壤、ピットを検出した。遺構は1区中央付近で集中して検出した。土壤は平面橢円形を呈するものが多いが、規模は様々である。

SK11は1区北半中央で検出した平面長円形を呈する土壤である。長径66cm、短径38cm、深さ8cmである。埋土からは弥生土器、土師器が出土した。117・118は弥生土器である。117は高杯の杯部口縁部である。端部外面には凹線が2条巡る。端部はわずかに肥大している。118は短頸壺の口縁部と思われる。表面磨滅のため詳細は不明である。

SK12は1区北半西辺で検出した平面不定形な土壤である。長径70cm、短径60cm、深さ15cmである。埋土からは弥生土器が出土した。119は弥生土器である。高杯の杯部口縁部である。斜め外方に立ち上がり、端部は肥大している。口唇部は水平である。よこなで調整による凹凸は見られるが、凹線等は施されていない。

ピットは規模は様々であるが、平面円形を呈するものが多い。

SP46は1区北半中央で検出した平面橢円形を呈するピット

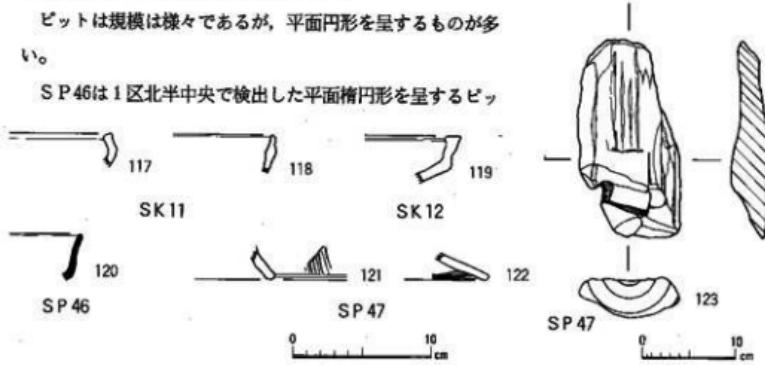


図17 1区 第3遺構面 遺構出土遺物実測図

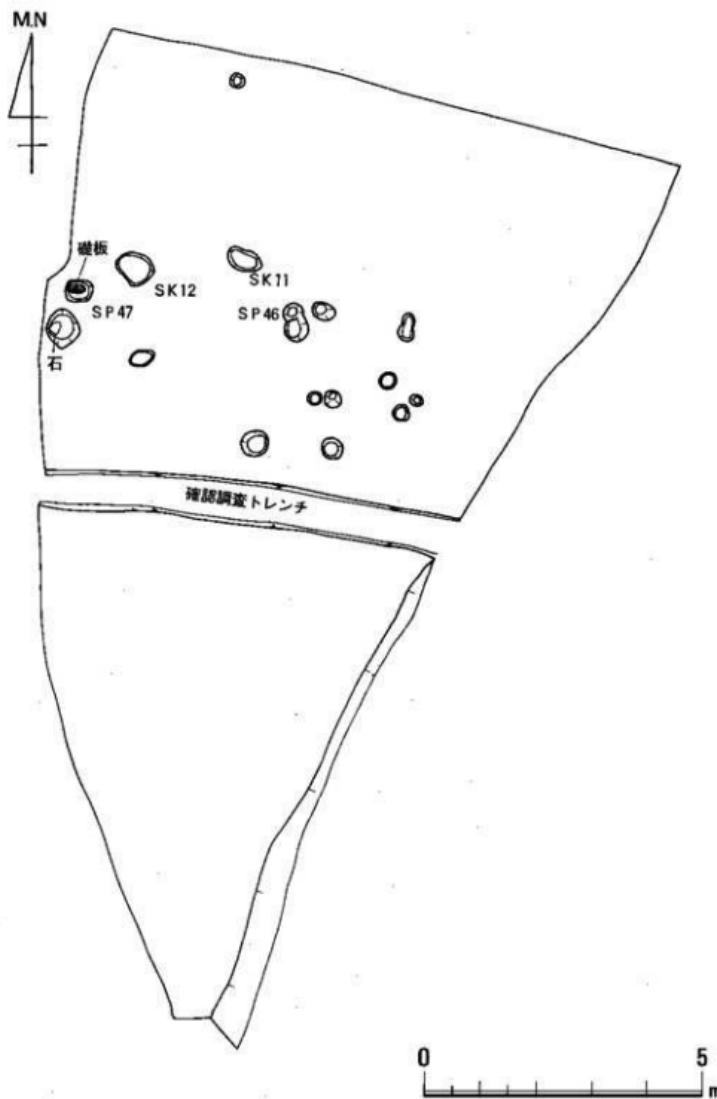


図18 1区 第3造構面平面図

トである。南東部で別のピットと切り合っていた。長径38cm、短径30cm、深さ20cmである。埋土からは土師器、須恵器が出土した。120は須恵器である。杯の口縁部である。内外面とも回転ヨコナデ調整が施されている。

S P 47は1区北半西辺で検出した平面隅丸長方形を呈する土壙である。長径48cm、短径39cm、深さ5cmである。123の板状木製品が遺存していた。123の検出時に上面であった面はくぼんでいる。下面であった面には自然面を残している。側面は斜めに切断された痕を残している。礎板の可能性がある。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土している。121・122は弥生土器である。121は器台の口縁端部である。外面にはへら書きによる鋸歯文が描かれている。胎土は粗い。122は高杯の脚端部である。外面にはへら磨き調整が、内面には粗いはけ目調整が施されている。外面は丹塗りである。胎土は精製されている。

第3造構面の時期は奈良時代前半以前に位置付けられる。この時期、調査地は居住地として利用されていたのである。しかし、造構の数量から見て、積極的に利用されていたとは考えられない。

※ 平井 勝氏のご教示による。

6 2区 第1造構面

第1造構面は明赤黄色粘質土を除いた面である。造構面は西から東へわずかに傾斜していた。レベルはT.P.+72.4~72.5mである。

明赤黄色粘質土からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、スラッグ等多様な遺物が出土した。

124~128は弥生土器である。壺、または甕の底部である。124~126は内面に成形時の指頭圧痕が残存している。外面は磨滅のため調整は不明である。125の底部は上げ底である。127は内面と外面底部になで上げて成形した痕跡が残存している。底部は上げ底である。128は外面にはけ目調整が施されている。内面は成形時の凹凸を残す。底部は突出し、不安定である。125~128の胎土は粗い。

129~154は土師器である。129は甕である。頸部は屈曲し、口縁部はわずかに外反する。内面には指頭圧痕が残存している。130は脚台部である。脚はつまみ出しで形成されている。131・132は杯である。131の体部にはよこなで調整が、底部にはなで調整が施されている。132の体部は斜めに真直ぐ立ち上がる。よこなで調整が施されている。底部内面にはなで調整が施されている。やや上げ底である。133は碗の体部上半である。口縁部はわずかに外反する。よこなで調整が施されている。134~141は小皿である。134・135の口縁部は内弯し、136~140の口縁部は外反している。134~140の口縁部には1段のよこなで調整が、底部の内面に

はなで調整が施され、底部外面は無調整か、なで調整が施されている。141の体部にはよこなで調整が、底部内外面にはなで調整が施されている。体部はよこなで調整の凹凸が著しい。142は皿である。口縁部はよこなで調整が、底部内面には粗いよこなで調整が、底部外面にはなで調整が施されている。底部内面はよこなで調整の凹凸が著しい。143～145は杯、または皿の底部である。内面はよこなで調整が施されている。146～149は貼付け高台の底部である。146～148の高台は高くしっかりしている。149の高台は形態化している。150は台付続の底部である。高台は外方に踏張っている。胎土は良い。151・152は羽釜の口縁部である。外面の锷より下方には炭化物が付着している。151の锷は断面台形を呈し、角張っている。152の锷は断

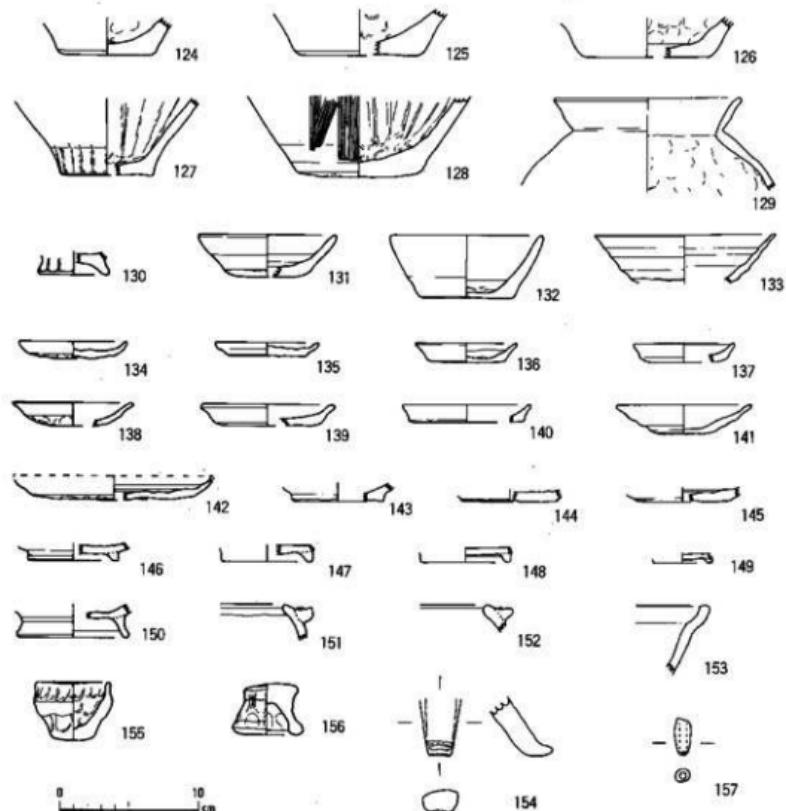


図19 2区 明赤黄色粘質土層出土遺物実測図(1)

面三角形を呈し、かなり丸味を帯びている。153は土鍋の口縁部である。154は三足土器の足端部である。安定性を増すため、端部を折り曲げている。表面はなで調整が施されている。155・156は手づくね土器である。155は椀であろう。体部はやや内寄する。外面に一部帶状になで調整が見られるが、他は無調整で指頭圧痕が残存している。胎土は粗い。156は脚部であろう。脚はつまみ出しで形成され、端部は肥大している。胎土はやや粗い。157は土鍤である。一端は欠損している。胎土は良いが、焼成は軟質である。

158～178は須恵器である。158～162は椀の口縁部である。161・162の端部はヨコナデ調整のため外反している。調整は内外面とも回転ヨコナデ調整が施されている。163は椀の下半分である。体部は内寄しながら立ち上がる。高台は高く、外方に踏張っている。内外面ともヨコナデ調整が施されている。164～171は椀、または皿の貼付け高台の底部である。164・165の高台は断面四角形を呈し、165～170の高台は断面三角形を呈する。167～169の高台は外方に

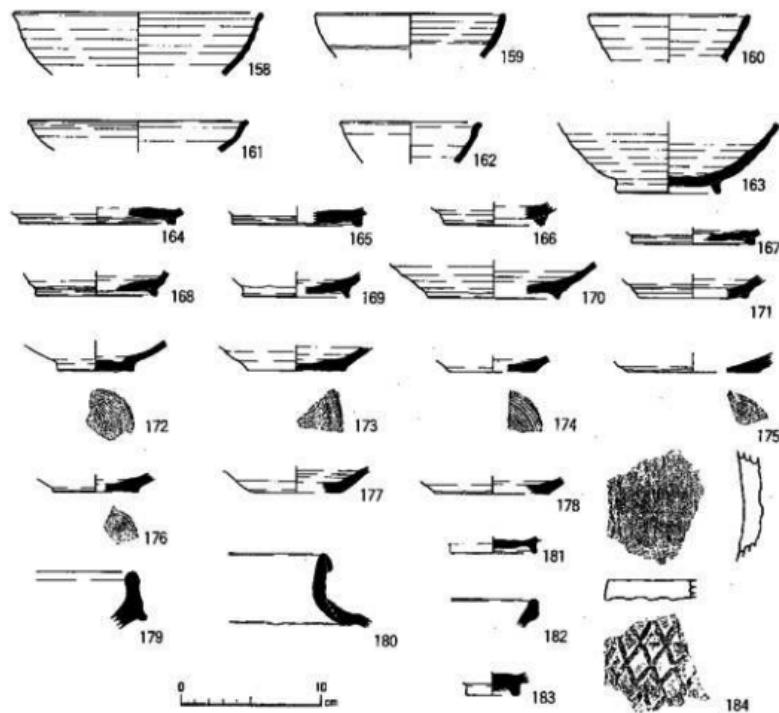


図20 2区 明赤黄色粘質土層出土遺物実測図(2)

張っている。171の高台は断面三角形を呈するが、低く、形骸化している。高台というよりは、底部を拡張している様な状態である。172～178は糸切り痕をもつ底部である。172の底部は、一見高台を思わせるほど突出している。178はいわゆる生焼けで、灰白色を呈する。179・180は備前焼である。備前焼特有の酸化炎焼成による赤褐色を呈し、硬質である。179は擂鉢の口縁部である。端部は下方に拡張している。端面に凹線は施されていない。180は壺、または甌の口縁部である。口縁部はほぼ直立する。端部は折り曲げられ、玉縁状を成す。181は高台をもつ底部である。高台は高く、外方に踏張っている。182は白磁である。碗の口縁部である。

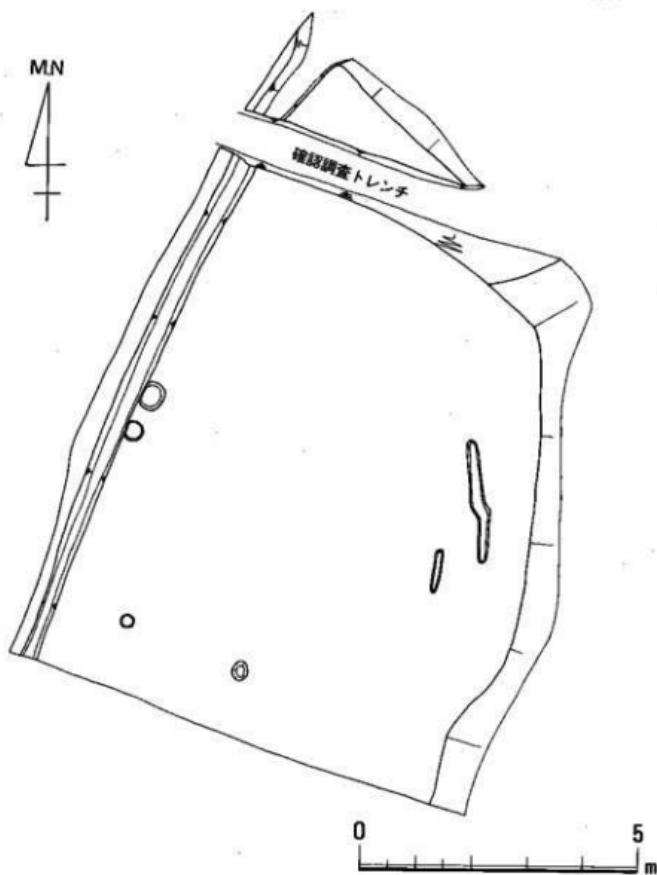


図21 2区 第1構造平面図

端部は玉縁を成す。表面はやや緑色を帯びた淡灰色を呈する。183は施釉陶器である。高台は削り出している。内面と体部外面には暗緑色の釉が施されている。露胎は淡灰色。断面は明淡灰色を呈する。184は平瓦である。外面には布目痕が見られ、内面には格子目叩きが施されている。焼成は良好で、硬質である。

第1遺構面では溝2条、ピット4基を検出した。

溝は2区東辺中央で検出した。ほぼ並行し、幅15~20cm、深さ1~4cmである。淡黄灰色細砂を埋土とする。東側の溝から土師器が出土した。

ピットは1区南辺中央で2基、西辺中央で2基検出した。平面円形を呈する。灰色系砂質土を埋土とする。埋土から土師器の小片を出土したものもある。

第1遺構面の時期は近世に位置付けられる。この時期、調査地は耕作地として利用されていたのであろう。遺構が極めて少ないのも、後世の耕作の影響と思われる。

7 2区 第2遺構面

第2遺構面は調査地の東半に堆積していた灰色系砂質土層を除いた面である。すなわち、地山面である。遺構面は西から東へ傾斜し、レベルはT.P.+72.1~72.5mである。

灰色系砂質土層からは弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、青磁、磁器が出土した。185は弥生土器である。表面磨滅のため調整等は不明である。186は須恵器である。糸切り痕をもつ底部である。底部はやや上げ底である。187は備前焼である。底部はナデ調整、体部は回転ヨコナデ調整が施されている。表面は酸化炎焼成による赤茶色~暗茶色を呈する。口縁端部に茶色の自然釉が付着している。188は青磁である。表面は厚く釉がかかり、淡灰緑色を呈する。断面は白灰色を呈する。



図22 2区 灰色系砂質土層出土遺物実測図

第2遺構面ではピット、落ち込みを検出した。

ピットは落ち込みの周囲で散在して検出した。まとまりはつかめなかった。規模は様々だが、平面は円形を呈する。埋土は灰色砂質土を基本とする。埋土から土師器が出土したものもある。

S P 05は2区北端で検出した平面円形を呈するピットである。直径22cm、深さ15cmである。暗灰色砂質土を埋土とする。埋土からは土師器が出土した。189は土師器である。皿の底部である。体部外面にはよこなで調整が、他の面にはなで調整が施されている。表面は肌色を呈するが、断面は黒灰色を呈する。

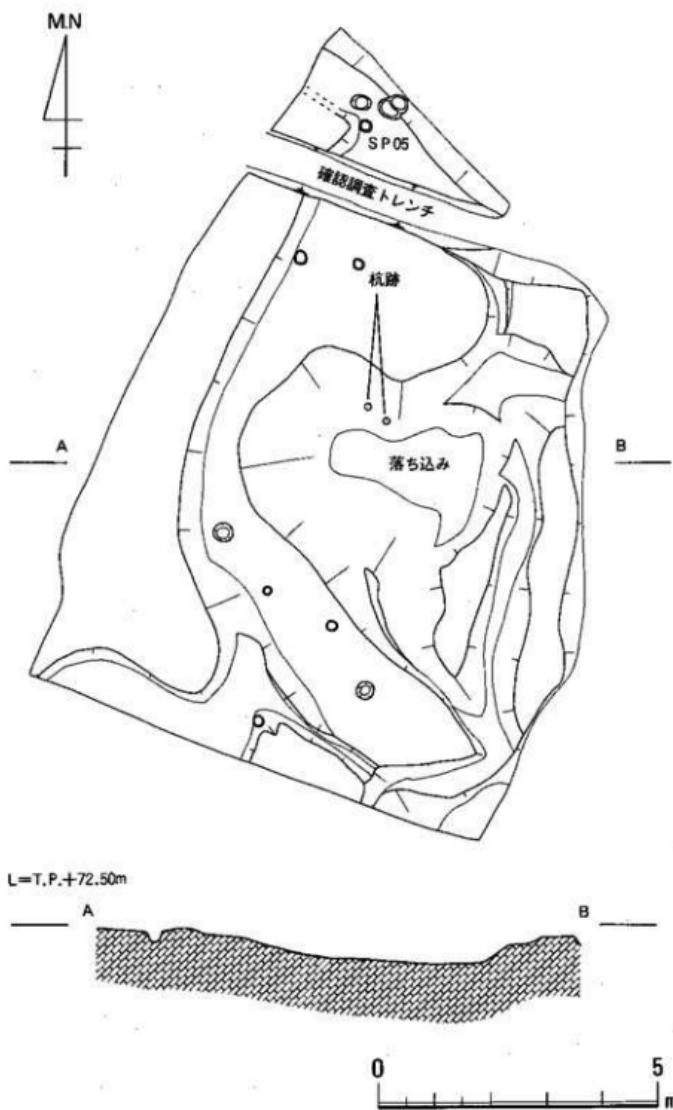


図23 2区 第2遺構面平面図・断面図

落ち込みは2区のほぼ中央で検出した。平面は不定形であるが、東西485cm、南北370cmを計る。北側の斜面で木杭を2本検出した。底面はほぼ平坦である。斜面の傾斜は東側を除いて、緩やかである。埋土は灰色粘土を間層とし、上層は淡黄灰色砂質土、下層は暗青灰色砂質土である。埋土から土師器、須恵器、備前焼が出土した。191は備前焼である。擂鉢の口縁部である。端部は下方に拡張している。口縁部外面には浅い凹線が4条巡る。焼成はやや悪く、表面は黄肌色～赤肌色を、断面は灰肌色を呈する。192は銅錢である。3枚の銅錢が多少ずれながら重なっている。固く接着し、分離出来ない。1枚目のものは鋳化が著しく、全体の半分しか遺存していない。銭種は不明である。2枚目のものは状態は良いが、1枚目の銭のため、全体の1/6程度しかうかがえない。『□□天宝』と見える。3枚目のものは、2枚目の銭と重なり、銭文はまったく見えない。

落ち込みからは東側へ1条、南東側へ2条の溝が出ている。この落ち込みは、高位側から水を集め、さらに低位側へ送り出していたのであろう。

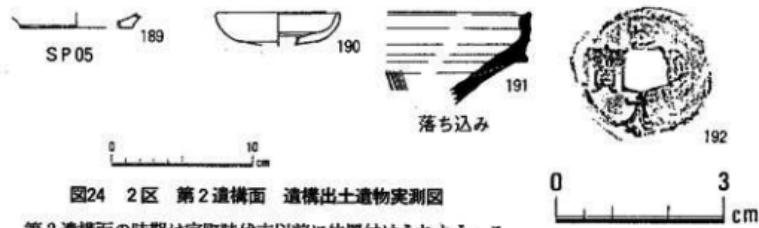


図24 2区 第2遭構面 遺構出土遺物実測図

第2遭構面の時期は室町時代末以前に位置付けられよう。こ

の時期、調査地は耕作に伴う水利施設として利用されていたのであろう。

IV まとめ

遺構面の対応

まず、1区と2区の各遺構面の対応を考えてみたい。

各遺構面の時期は第III章で述べてきた。ここでそれをまとめてみると、以下の様になる。

1区

第1遺構面	室町時代前半	第1遺構面	近世
第2・3遺構面	鎌倉時代前半	第2遺構面	室町時代末
第3遺構面	奈良時代前半		

2区

では、調査成果に基づいて、調査地の変遷を追ってみたい。

古墳時代以前

包含層より繩文土器、弥生土器、土師器が出土している。近隣に同時期の集落が存在すると考えられるが、調査地内において、明確にこの時期に位置付けられる遺構は検出されなかった。

この時期、調査地周辺は谷部のため、人々は積極的に進出して来ていなかったのであろう。

奈良時代

調査地内では土壤、ピットが見られる。しかし、数量は少ない。1区に礎板、礎石と思われるものをもつピットがあることから、建物の存在が想定できる。

この時期、人々は調査地を居住域として利用するために、この谷部へも進出し始めたのであろう。

平安時代～鎌倉時代

調査地内では土壤、ピット等が見られる。特に1区に多い。1区には掘立柱建物も建ち、調査地が最も盛況を呈する時期である。調査面積が狭いため、どの程度建物が建っていたのか不明である。しかし、ピットの数や柱根の残存から考えて、複数の建物があったか、複数回の建て替えがあったと見るのが自然ではないだろうか。

この時期、調査地は居住域として利用されていたのであろう。谷部の堆積作用が進み、居住域として利用しやすい環境になったのであろう。

室町時代

調査地内では溝、ピット等が見られる。いずれも少数である。2区では水利施設と思われる落ち込みが見られる。

この時期になると、調査地は前代とは全く様相を異にする。上位側（1区）は耕作地として、下位側（2区）は水利施設として利用されていたようである。谷部の堆積作用がより進み、耕

作域として適当な条件が整ったのであろう。灌漑技術の進歩が生産域のより一層の拡大を促進したのではないだろうか。

近世以降

調査地内では溝、ピットが見られる。前代よりも少數である。遺構数が少ないので、調査地を含む谷部がより積極的に耕作地として利用され、耕作を繰返したためではないだろうか。収穫の増加を目指す農民の意欲と、農業技術の進歩の結果であろう。

そして、現代に至るまでこの地は耕作域として利用されて来ている。

最近になって、『減畠』のために休耕地が増えているのは皮肉なことである。

今回の調査は、新庄尾上遺跡の調査と掛け持ちであった。調査地間は直線距離にしてわずか1kmほどであったが、その間の移動も度重なると、時間的、体力的なロスはかなりのものになる。また、調査員の不在時に作業員だけの判断で掘削したり、調査員自身も十分な問題意識をもつ余裕もなく調査を進めてしまったため、今になって疑問が生じて来ている。

調査面積や調査期間にかかわらず、『記録保存』である以上、十分な記録を作成するためにも、複数現場の掛け持ち調査は避けるべきである。今回の調査は特異な例であることを明記しておきたい。



写真1 調査地遠景（東から）



写真2 調査地近景（西から）



写真3 1区 第1造構面 2区 第1造構面（南西から）



写真4 1区 第1造構面 2区 第1造構面（北から）



写真5 調査風景



写真6 調査風景



写真7 1区 第2・3遺構面 2区 第2遺構面（南西から）



写真8 1区 第2・3遺構面 2区 第2遺構面（北から）

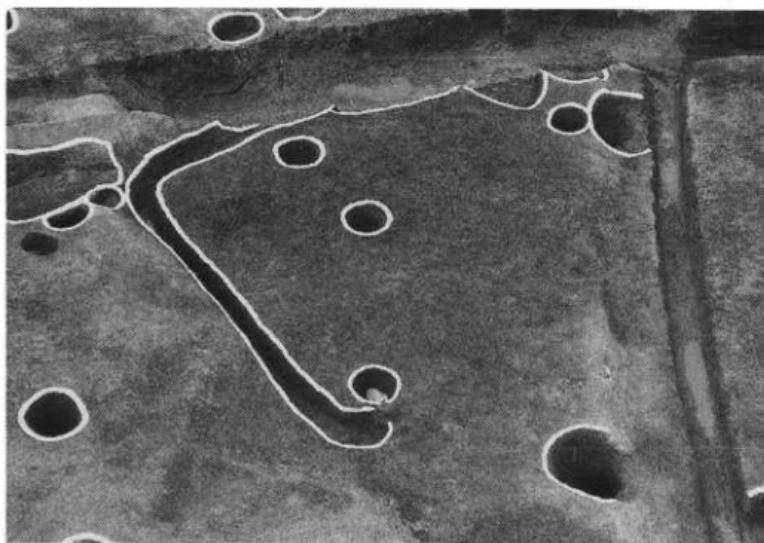


写真9 1区 第2・3造構面 SP40遺物出土状況（南西から）

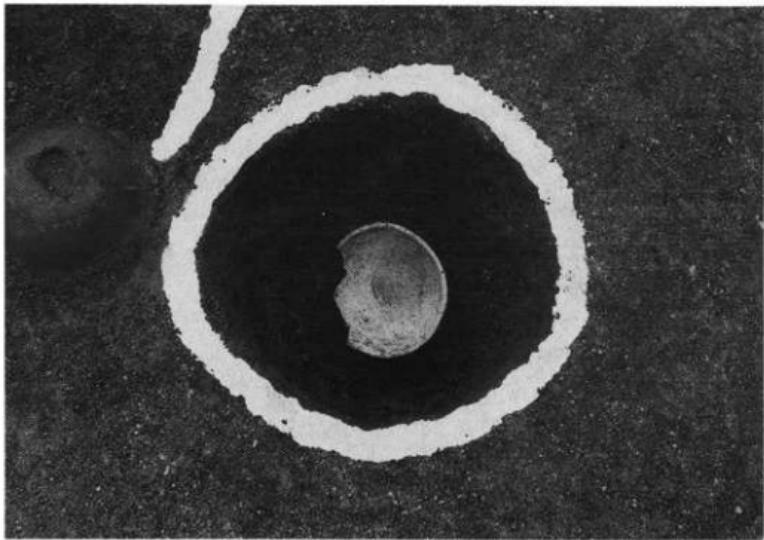


写真10 1区 第2・3造構面 SP40遺物出土状況（東から）



写真11 1区 第3遺構面（南から）

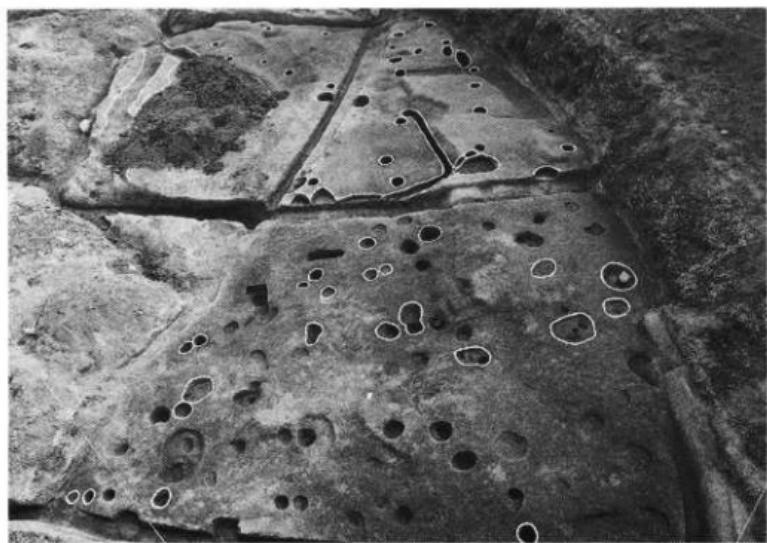


写真12 1区 第3遺構面（北から）



写真13 出土遺物(1)

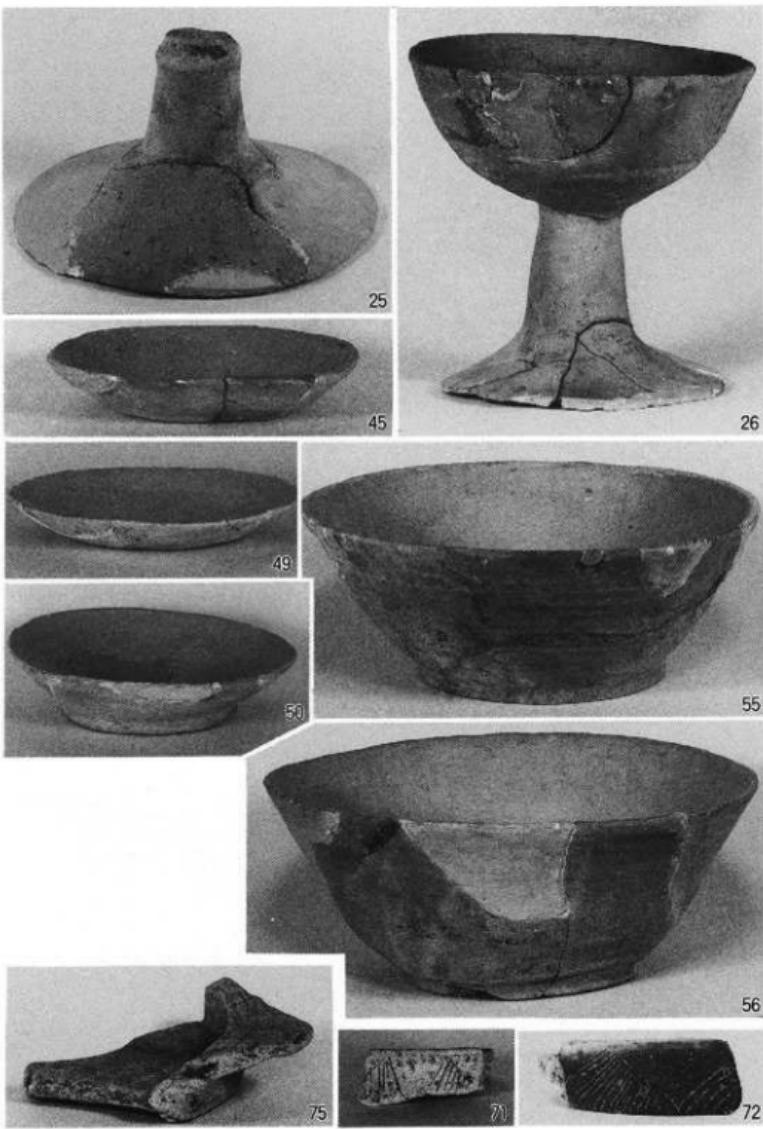


写真14 出土遺物 (2)

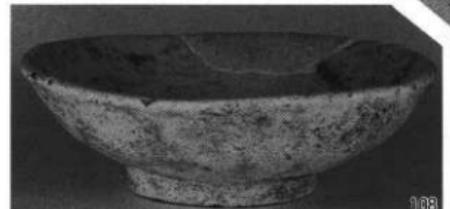
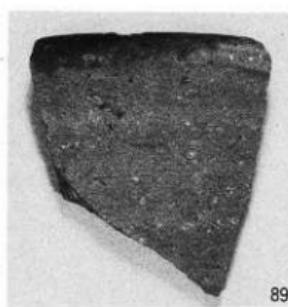


写真15 出土遺物 (3)

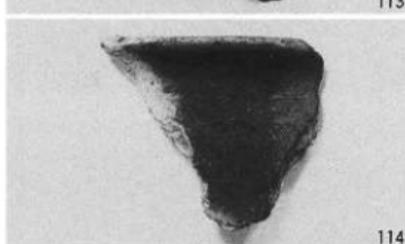


写真16 出土遺物(4)

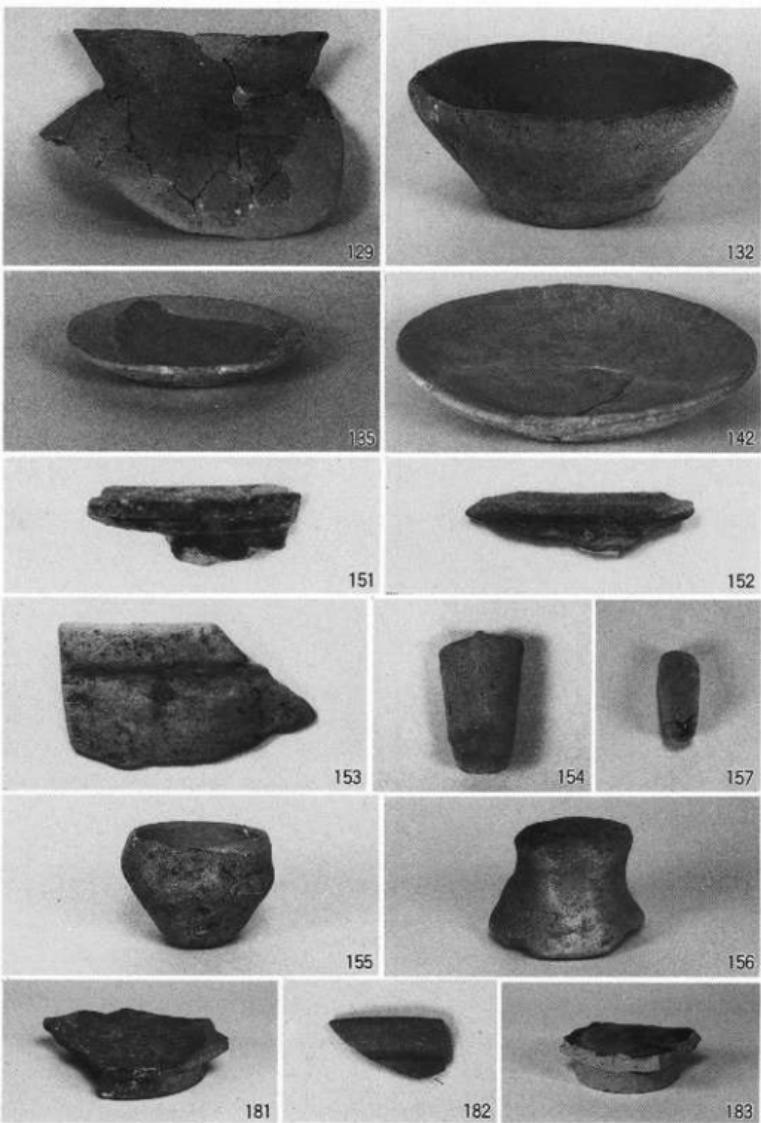


写真17 出土遺物(5)

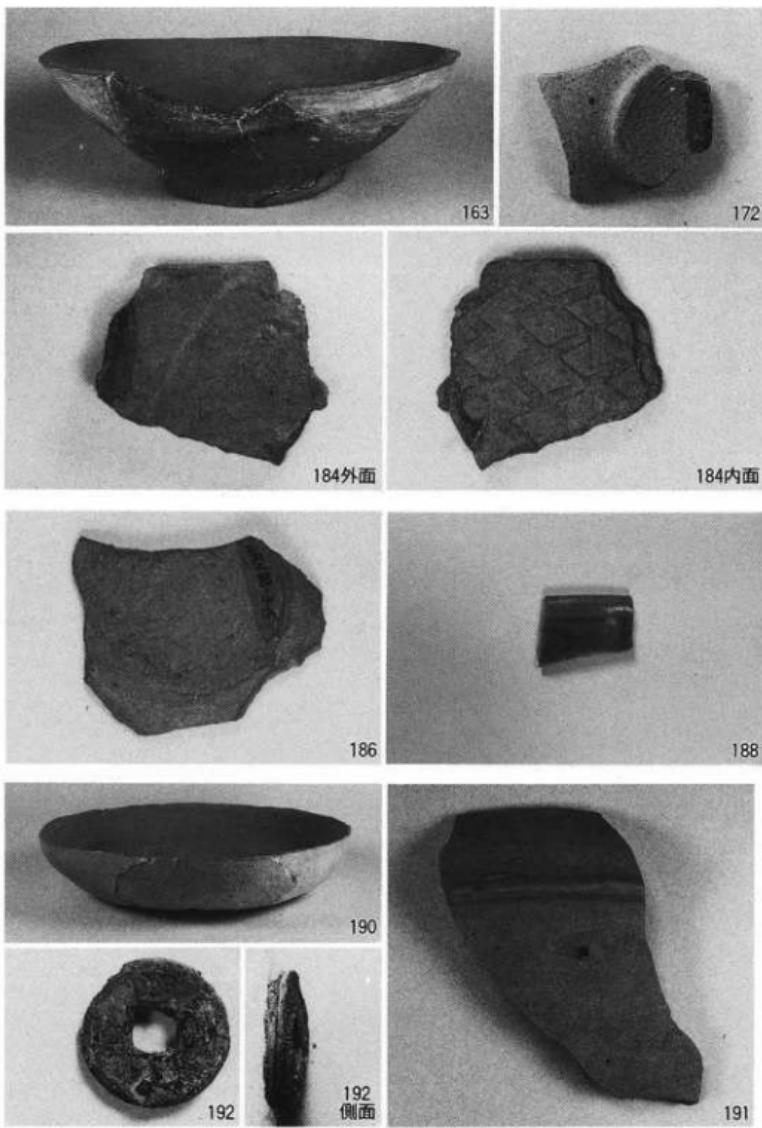


写真18 出土遺物 (6)

御津町埋蔵文化財発掘調査報告7

平岡西遺跡Ⅱ

1991年3月31日発行

発行 岡山県御津町教育委員会
岡山県御津郡御津町大字宇垣1629

印刷 柳本印刷株式会社
岡山県総社市総社1丁目10番24号